

パネルディスカッション「私立大学の効用と大学改革」

司会：私学高等教育研究所 主幹 西井 泰彦

(西井)

時間になりましたので、パネルディスカッションを開会したいと思います。

只今のお話、かなり幅が広くて石田先生は大学の改革、人づくり興動館教育というような教育面での大学の取組を最初にいただきました。その後、島先生の方からは大学の効用ということで、いくつかの教育経済学的な知見を元に大学教育の意味等についての提供をしていただきました。濱中先生は女性という点に着目して、女性の進学志向動向等についてのご説明いただき、最後に矢野先生が根源的な問題としての高専、大学教育の役割という説明があったと思います。

今日は大学と社会、職業、あるいはもっと幅広いその中で人間教育、大学教育という在り方を議論になったわけで、非常に幅が広いのですけれど、一つの特徴点は大学が職業にどう結び付くか、所得の問題もありますけれども、その辺りが非常に大きなテーマだと思います。

この5月に文科省が専門職業大学の方向性を明確に出しました。大学と大学教育の中の専門教育という扱いがこれからの課題となり、新しい学校教育制度が作られる現状になってきました。今日のテーマも大学の職業教育の在り方、あるいは職業に対する寄与の仕方という議論が出ました。当然、職業大学、仮称ですけれど、職業大学あるいは職業短期大学というものがこれからの課題になってきます。皆さんのおかれた学校でも職業教育の問題、これは資格教育も含めて、あるいは様々な学部学科の在り方も含めてこれからの検討の重要な課題になってくると思います。

最初、これは私の質問でありますけれど、大学のそういう役割、あるいは類型化ということに対して今後どういう風に考えれば良いのか、あるいは進学率が上がるという状況も踏まえて、これから大学の職業教育の在り方をどう見たら良いのか、その辺りをお聞きしたいと思います。最初に私の方からご指名を差し上げますけれど、濱中先生いかがでしょうか。専門学校等の議論も出たことですので、是非セッションを頂ければと思います。

(濱中)

ありがとうございます。いきなり大きな疑問を投げかけられてちょっと戸惑い「えっ」と言ってしまったのですが。そうですね、新しいこの職業に特化した大学というのは、少なくとも女子にとって魅力あふれる進学先として映ると思うのですが、何分まだ全然形が見えていないので、これからどうなっていくのか、制度設計次第だとは思いますが。ただ、現状ベースで考えますと、例えば仕事とのマッチングが見えやすい専門を掲げているところと、そうではなくて教養といったアバウトなところと、さまざまな学部があるわけですが、学生

を見ていますと、専門というものがある方がしっかりと学びに取り組んでいるようにみえます。おそらく、体系だった学びが、何と言いますか入門から始まって応用発展みたいにきちんとルートができていますので、学び方がわかりやすいんだと思います。そういった意味で、学びがしっかりした、そして資格にも学びつく機関ができれば、今後どんどん勢力を伸ばしていくのではないかなというような気はするのですが、ただやはり制度が何分見えていないので、すいませんがこれぐらいで。

(西井)

はい、ありがとうございます。専門学校あるいは新しい職業大学、それを仮に生涯所得に換算したらどうなるか。専門学校を含めたそういう研究はまだこれからだと思います。島先生からは、今日の資料の中で相当詳しく、私立大学も含めて所得への影響など説明していただきました。現在では、家計の状況で、大学進学を諦めて専門学校に行ったり、あるいは短期大学への進学を迷う時代になっています。大学に行った効果と短期大学あるいは高等学校へ進んだ効果に数千万円の所得差が出てくるならば、仮に学費の500万円、1,000万円を支払っても、大学に行った方が有利であるという見方もあります。そういう見方は以前ありましたけれど、進学先を選ぶ上で重要な観点があると思います。

新しい職業大学制度あるいは専門学校を含めて、大学あるいは専門学校の効用について、少し範囲が広がりますが、島先生はどのようにお考えなのかお伺いしたいと思います。

(島)

今のお話はそれこそ濱中先生の発表との関連で明確にしなければいけないのは、男性と女性で全然話が違うということです。それで、私が男性担当ということ言うならば、やはり実を言うとこれはもう濱中先生の発表の中にもあったことですが、男性の場合だと、大学一人勝ちの状態になっていて、専門学校というのは経済的には大学と比べれば投資先としては魅力が少ないというような状況になっておりまして、ただ、それが職業大学になってどう変わりうるのかという事に関しては、そのポジティブな可能性がないとは言えない訳ですが、それが途端に経済的な効果という面において大学を超えるような効果が予想されるかという、必ずしもそこまで明るくポジティブな未来は描きにくいのかなと思っています。ただし、そこで行われる教育の内容というのが、むしろ我々が今日した話の中の一番大事な部分で、実際その中で大学教育、職業大学教育というものが極めて魅力的で、各人の専門的、汎用的能力を高めるという教育がしっかりできるのであるならば、それは、また今私が最初に言った以上の効果を持ち得るのかなとそういう風に思います。

(西井)

はい、ありがとうございます。矢野先生にお伺いしたいのですが、矢野先生はたまたま縁があつて高専という機関に現在携わっておられます。新しい制度が作られ、しかもそれ

が職業教育の中で非常に重要な役割を果たすであろうということで、日本の国の高等教育制度として見た場合に、あるいはアカデミックな立場とボケーションな立場を踏まえて全体的な観点から、もしご意見があればいただきたいと思います。いかがでしょうか。

(矢野)

大きなテーマですけども大学教育の効用というものを考えるにあたって、年収であるとか、私は仕事の満足度も大事だと思っていますけれど、そういう年収及び職場のですね、仕事の有効性、そういうものを規定しているのはそれぞれの社会人がどういう力を身につけているのかに依ると思うのです。現在の力の源泉はどこにあるのかという問い方を設定して、そこから年収なり、仕事の満足度というものを考えるという視点が面白いのではないかとというのが僕の問題定義で、そういう意味で社会人力、成人力がどのように形成されているのか、その時に学校教育は一体、どういう効果を持っているのかという問いを考えてみたのです。話をかなり省略して喋っていますけれど、職業大学が登場するのは、基本的に大学教育は社会に出て役に立たないという大きな前提があって、直ぐに役立つ教育を重視しましょう。従来の大学教育はあまり役に立たないので役に立つ制度を作りましょうという発想が基本にある。それも間違っているとは思いませんけれども、まず大前提として大学教育が一体仕事にどのように結び付いているのかとはっきりさせた上で議論しなければいけないのではないかと思います。意外と大学教育が仕事にどのような効用を持っているのかという研究が非常に少なく、その為に話が混乱していると思います。大学教育も役に立つと同時に職業教育も役に立つ、それは当然両方共役に立つ。そこで、ひとつ今回の私達の調査での重要な問題は、大学教育でも高専教育でも熱心に学ぶかどうかという点で、学びが将来の能力を向上させているのはどうも間違いならしい。ところが、実は現在の能力というものは学校教育だけに規定されている訳ではない。卒業後にどれだけ勉強したかという事が重要なのだと。そういう意味で今日の話は学校成績が役に立たないという議論が多いので、それに対する違うデータを提供しているのですが、実は現在の能力に強い影響を与えている要因は、会社なり職場で卒業してからどの程度学んだかという事と、今回の調査でひとつ重要なのは、仕事で困ったときに相談できる友人がどの程度いますかという調査をしている。難しい問題に直面した時にそれを解決するのは個人の能力だけではない。そうではなくて、周りにその問題を解決することを助けてくれる友人がいるかいらないか。それが実は安定的に強い影響を与えている。だから学校教育だけで今の能力が形成されている訳でなくて、現在職場で困ったときに助けてくれる、相談できる友人がいるかどうか。これは極めて重要な要素になる。そういう意味で職業に就いてからの人間関係というものが大きな資本になっているのです。その資本があって初めて学校教育の有効性が発揮される。従って職業大学ができて、職業大学だけで、2、3年だけで人生ずっと仕事ができる訳がない。従って、職業がどんどん変わっていく中で直ぐに役立つ教育をやるということは、10年経ったら役に立たないということであるのだから、10年経っても役に立たないということがなくなる為に

は、職業大学を出た後に学ぶ機会というものがなければ、当然その人の能力は向上しない。そういう意味で、職業大学であろうと大学教育であろうと、やはり卒業後にどのような学びをするかというポストスクーリングの職業訓練がとても大事である。そして人的資本、ヒューマン・キャピタルの理論は学校教育＋職業教育訓練の効果が重なって生涯賃金は決まると言っている。生涯賃金は大学教育だけで決まるというモデルを作っているのではなく、卒業後にどれだけ職業訓練、OJTを行うかというOJT投資量が賃金カーブを規定している。従って学校教育だけで賃金・生涯所得が決まるということは誰も言っていない。むしろ職業後の訓練投資効果があって、つまり学校教育と職場訓練投資効果の合算としての人的資本が現在というものを規定している。ということなので、職業教育、大学教育の良いところ悪いところそれぞれあると思いますけれども、やはり本人のお勉強、つまり皆さん職場にいて、今日1日の効果ではなく、日々どれだけそういう学ぶ機会を持っているかどうかが大切ではないか、と。学ぶ機会を沢山持っている人がその人の能力発揮としての仕事の生産性を向上させている訳なので、単純にはどちらの制度が良いという事ではないのではないかと思います。

(西井)

はい、ありがとうございました。職業の問題についてもう少し聞きたいところなのですが、質問が出ております。1つは島先生に対して、資料についてですが、国立大学と私立大学の所得の差がでていて、これはどうしてかという質問があります。もう1つは、経済的な効用以外の教育と健康の間のブラックボックスについての補足説明をして欲しいという要望がありました。島先生お答え下さい。

(島)

ありがとうございます。ただ、申し訳ありません。司会の西井先生の意に反して少しだけ、今矢野先生が仰ったことに私も少し補足をさせていただいた後、回答したいと思います。

今日の発表の中で若しくは濱中先生が今日は発表されていませんが、別の論文で書いていることで、生涯学習、今どれだけ学習投資をしていることが極めて重要だという色々なデータ、しかも自己学習投資というものの計り方を色々変えてみてもそういった結果が出ているということを共有したいと思います。そして、それは先ほど矢野先生が仰った労働経験年数が長い、労働経験年数が長いということは職場に入ってからの仕事における投資を表す変数として考えられるのですけれども、それをコントロールしたうえで、生涯学習投資をしているという事が、所得を高める効果があるという形になっていることを確認したいということが1点。因みに濱中先生の著書の中で自己学習時間が長すぎるとまた違った結果が出るという分析をされていたりするのですが、そういった形で生涯学習に関する、若しくは学習投資に関する議論は重要だと。そして、僕の分析ではその自己学習の程度は学歴が高くなるほど、大学、大学院に進む程多くなるという結果になっていて、これは大

学教育とかそういった意味においてもとても重要な情報なのではないかと理解しております。

もう1つですね、汎用的能力に関して、実を言うと矢野先生と私がそれぞれ大人の汎用的能力、全然違うアプローチで矢野先生は主観的なもので、しかも対象は高専で、僕は客観的なPIAAC（国際成人力調査）のデータを使って、学歴を問わずという形で分析をしていて、これも教育年数、つまり学歴等をコントロールしたうえでもそれが所得に影響する。更に、実を言うと教育年数、学歴、大学教育を受けている程、汎用的能力が高くなるという繋がりになっている。こういったことも教育と所得を結ぶメカニズムとして是非理解をしていただきたいし、そういう意味においてもやはり大学教育っていうのは重要だろうと思います。

先ず、健康の方ですけれど、お配りした資料を見てください。こちらを見ていただくと、ご質問は大学、大学・大学院教育が健康にプラスに働くメカニズムについてお教えくださいとご質問はなっているのですけれど、この図が言っていることは、実を言うと大学、大学院教育を受ける、教育年数が長いということは必ずしも直接的には健康と繋がっていないという結果です。因みにこの健康というのも主観的な変数で、私はとても健康だと思う、やや健康だと思うといった類のものなので、そこはちゃんと理解しておいていただきたいのですけれど、つまり学歴が高いからといって健康だ、ということではない。だけれども、教育というものが健康に役に立たないかというところではなくて、この図が言っていることは、そういう教育年数の長い大学、大学院教育を受けるということは、僕が定義しているところの学習力というものが高まる。学びに対する肯定的な態度だとか、学び方についての能力だとかが高まる。そういう人ほど健康だと答える傾向になっている。そういう分析結果になっていると理解してください。そういう意味でいうと、大学教育を受ければ何でも直接的に何か効果が生まれるという訳ではなくて、その間に媒介変数として例えば学習力や汎用的能力であるとか自己学習とかがあって結果を生み出すというメカニズムであるという訳であります。

もう1つは設置主体別の生涯賃金の差が、最終賃金の伸びが国立私立によって違っているが、これは教育の質の違いによるものと解釈するのか、或いはシグナリング理論的なものなのかというご質問なのですが、働き始めた時点では国立大卒、私立大卒ではあまり賃金の差がない。だけれども、年齢と共にその差が大きくなっていく。これはなぜなのかというご質問に、私の方で解釈を変えてお答えすると、シンプルに言えば、この変数がどの程度影響しているという言い方はできないのですけれども、僕がやった分析に仮に基づくならば、国立で行われている教育が例えば、より自己学習を高めるような内容になっているだとか、汎用的能力を高めるという形になっているだとか、学習力を高める形になっていることが考えられることですね。それ以上のことは僕が示したデータからは言えない形になりますし、一方でこちらの方がこれはシグナリングなのではないですかというようなご質問をいただいているのですが、寧ろシグナリングだと、多分国立大卒と私立大卒の人達の生得的能

力は変わらずに、国立大学だから賢いだろうという風に実際の採用が行われているとしたら、就職当初から国立一私立大学歴格差みたいなものがあるべきですが、データはそうになっておらず、また最初にそういう見方をしたときには寧ろ年齢と共に実際の実力はばれてくるので、離れていくというよりは、その差が小さくなっていくはずなので、データは逆の動きをしており、そういった解釈は難しいのかなと思います。以上です。

(西井)

はい、経済的な要因とか効果というのは色々難しいし、学ぶことの意味ということもまた問われているという内容になっていると思います。これは私からの質問でもあるのですが、大学を卒業したら、大体2、3億円ぐらいの所得が得られるにもかかわらず、当時まだフリーターがいましたが、フリーターのままだったら1億円にも達しないので、就職課の窓口の横に3億円と1億円の札束を積んで、貴方はどうしますか、と言って学生に提起をした大学がありました。これは非常に効果があり、自由を謳歌してフリーターをやるよりも、しっかり資格等を身につけて大学を卒業すれば生涯所得に何倍も差がつくと、学生もやる気を出したと話を聞いたことがあります。仮に所得が同額であったとしても、大学で受ける教育の意味、先ほど濱中さんも同様なことを仰っていましたが、経済的な効果を求めるだけではなくて、人間は大学に行くことによって何を得られるかということにもなります。お金の分析も大事ですし、国立と私立でこれだけ差があるのは大きな問題です。そのことが進学行動に結びつくかどうかは別にして、私学においても学生に付加価値をつけることをしっかりアピールしなければいけません。そういうことを踏まえて大学に進学することの意味を考え直すことが必要です。

女性の問題を濱中さんが提示されました。何故女性がそこまでやるのでしょうか。就職が厳しいから、或いは男社会の中で生き抜く為に力を付けなければいけないから、資格系のものを身に付けようとする意識になりました。しかし、看護にしても教育にしても、それは1つの知識であり技術です。でも、一方では大学の価値とはもっと汎用的な能力だとも言われている。これからの私立大学は何を重視していったら良いのかという根源的な課題にもなりますが、濱中さん、職業教育、人間教育を含めて女性教育をどうするかについてご発言いただけたらと思います。

(濱中)

また随分と大きな質問が投げかけられてしまって戸惑っているのですが、1つ、もし答えを提示するとなれば、確かに女子というのは資格とかそういったものにとっても強く反応するところがあったと思います。というのは、結婚出産しても復帰できるとか、そういったこともありますし、男性中心の労働市場の中でどういう風に働いていくのか、やはりその時は資格、教員、栄養士であったり看護師というのが分かりやすく必ず働けるからだといった認識があったからだと思うのですけれど。ただ、一方でひょっとしたら状況はこ

れから変わっていくのかもしれないなと思っているところもございまして、去年の冬に企業の採用人事関係者にアンケート調査をしまして、普通の事務系、技術系の総合職、所謂資格とはあまり関係のない職の採用面接を担当したことがある方にアンケート調査をしたのですが、その中で次の大卒の人、次の学歴の人達は「人材として使える」と思いますか？というような質問を投げかけたことがあります。つまり、東大京大といったような名の知れたトップ層、または GMARCH のようなところの卒業者、女子の大卒が使えるかどうか、日本の大学を出た留学生が使えるかどうか、または大学院生が使えるかどうかを聞いてみたんです。ちなみに、圧倒的に使えないと思われるのは大学院卒でした。理系の修士の人達はまだ使えると思われるのですが…。そして話を女子に戻しますと、女子は使えると判断している企業人がとても多かったという結果が得られました。何故、そのような評価になっているのか背景も探ってみたのですが、興味深い結果の1つに「企業人は、採用面接の場面で多く見てきた層を“使える人材”として評価する」という傾向が抽出されました。東大京大生を沢山見ている人は、東大京大生を評価する。GMARCH の人達を沢山見ている人達は、GMARCH を評価する。考えてみれば当然のことともいえるわけで、つまり、馴染みのない層、あまり関わったことがない層というものを評価するというのは、かなり難しいことですよね。相手がどういう人材なのかを知っていく中で、評価というのは高まっていくものなのだろうということを考えたことがあったのですが、再び女子の話に戻りますと、女子の大学進学率が急速に高まっていく中で、普通に労働市場において資格と関係ない仕事をする女子の大卒が増えてきました。そのことが、女子という人材を知る企業人を増やし、ひいては女子の評価を高めているということがあるのではないかと。だとすれば、将来的に、資格とは関係がなく、女子がいきいきと働けるような社会になることもあり得るのではないかと考えています。

(西井)

ありがとうございました。幾つかの重要なテーマが出ています。今日私を含めて、一番分かりにくいだろうと思ったのが、矢野先生の相互作用ということ。大学の在り方、大学以前の教育、或いはそれ以後の影響も含めて考える必要があります。我々は大学に携わっていますから、大学の教育力を少しでも上げるというのが役割だと思っています。しかし、それが果たして本当に効果があるのかと問われたときに悩みます。幾つかのモデルパターンではあまり見込みがないようなことを示されると、果たしてどうなのかなど。国公立の大学の立場でも差異があると思うのですが、その点、大変恐縮ですけれども、大学の在り方、大学の機能も含めてどういう課題が出てくるのか、どうしなければいけないのか、その辺りを矢野先生に補足してご説明いただければありがたいと思います。

(矢野)

私は割と単純に考えていて、サラリーマンは毎日、日々お勉強というのが変化する時代の

当り前の現象だと思うのです。、大学で学ぶという事は間違いなく誰にとっても役に立つ、役に立たないと言っている人の理由が僕には分からない。大学で学ぶことは誰にとっても、役に立っているというか、世界的どこでもそうなのですけれども、それをどういう形で説明するかというのが大事です。今の大学教育の大きな問題は大衆化した大学で、大衆化すればするほど、ある意味では中学校の成績が悪い人が大学に行く必要はないと思っている人が世の中に多いということが大問題。だから、今の大学教育の大きな問題は、能力がある人が大学に行けば効用があるけれども、能力がない人が大学に行っても効用がないと思っている節がある。そうじゃないのだということを私は色々な角度から言っている訳なのです。例え中学校の学力や学業成績が悪くても、大学に行って学べばそれだけ力はずついて、そして、それによって仕事をこなす力もできて、それなりの仕事をこなせるようになっていく。私の分析では、成績が悪ければ大学に行く必要はないというような考え方は、基本的に僕は間違っているような気がします。実際データでも、私は「大学の条件」という本を昨年出しましたが、その中で私が言いたかったことは、中学校の学力が低くても大学に行って学んだ効果は歴然としてあると。そのことはとても大事なことで誰でも学べばそれなりの効用が出るのだという事実を謙虚に受け止めて勉強しましょうということだと思っております。にもかかわらず、日本は、大学で学んだことは役に立たないとか学業成績なんて関係ないのだよと思込んでいる社会です。そして、その様に思込んでいる社会ですから、先ほど濱中さんが言ったように企業人事課は、大学教育は役に立たないという物言いがず一と戦後 70 年つづいている。その思込みが私は間違っているという証拠をです、私は機会があることに話しているつもりなのだけでも、中々それが通じなくて大学教育の効果というものがない。学歴はただのスクリーニングだけだと言われてしまう。スクリーニングだけで教育が説明できるのであれば、世界中でこれだけ高等教育が浸透する訳がない。そして、日本のみならず世界中で高等教育の大衆化がどんどん進んでいて、技術進歩の中で常に学んでいかなければいけない時代に、つまりスキルがなければ仕事にありつけないような労働環境にどんどん変わっている訳です。そういう技術進歩の激しい時代について行くためには、やはり学ぶという体験、経験を蓄積しなければいけない。読書する体験、経験を蓄積しなければ、学校時代に読書しなければ、社会人になってから読書をしません。社会人になってから急に読書しようと言っても難しい。これは私の学び習慣仮説なのだけれども、大学時代に学ぶ体験、経験の蓄積が資本になっていて、その体験、経験があるから仕事で直面した新しいテーマに対してどのように取り組めば良いかというノウハウが体に染みついている。そういった形で学校の学びというものと職場の学びは地続きになっているのです。この二つが切れている訳でもなくて、学校時代の勉強と職場の勉強は違う勉強なのだってことはあり得ない。地続きになっている訳なので、学校時代しっかり学びましょうということを学生たちに教えてあげることが大事。だから、私が某大学で一番初めに学び習慣仮説を提案して学校時代の読書習慣というものがあって初めてサラリーマンになって読書ができるのだと。だから学校時代にちゃんと読書習慣をつけなければ駄目ですよという話をデータに基づい

て学生に説明すれば、学生はやっぱり学ばなければいけないのだと、私は大体了解いただいたと私の授業では思っています。そういうある意味では当たり前のことがどうも日本社会では何か当たり前でなさそうになっていることが私には不思議に思えるというふうに思っております。

(西井)

ありがとうございました。日本の社会では学力でもそうですけど、上から下まで階層化されている。当然大学でも学力の上の方から選別をするとか、それが当然だという感覚があります。先ほど矢野先生の資料の中で、例えば中学校の成績が悪くても高専に入って頑張ると上がってくるというのは、それは正に教育の効果だけではないとしても、本人の努力も含めた1つの成果だと考えられます。そういう付加価値を付けていく、生涯学び続けて自分を成長させる、人間を作ることが大学教育だと私は受け止めました。そういう意味では、成績が上でなければいけないという見方が非常に強くて、その結果、下は振り落としなさい、下は辞めなさい、という議論に展開するようなどころがあります。私立学校の多くは、決してトップ層だけではなく、むしろ中間層以下を鍛えて社会的に有意な人材を作っていくところに重要な役割がある訳です。その辺りをしっかり認識して、私立大学の役割を果たすべきと受け止めました。

まだ討議時間が若干ございますので、今までの質問の中でどうしてもこれだけは言いたいことや今までのディスカッションの中での質問等がありましたらお受けします。いかがでしょうか。

それでは補足の説明が島さんからあるようですので、お願いいたします。

(島)

補足というのはちょっと僕がさっき使った言葉ですけれども、いずれにしても語弊があるので、私も追加で話したいということであると、大学が役に立たないという話に関して今日の矢野先生のお話は、先生が先ほど使われた言葉をそのまま繰り返すと、誰でも学べば伸びる、なんですよね。やっている分析は学んだ人ほど所得が上がっているとか、裏を返せば学んでない人は伸びていないっていう話なのですね。そうした時に、僕は正に矢野先生の大学院に行って、しっかり出来は悪かったけれども学ぶ経験を積ませていただいた人間として、大学院教育というのは極めて役に立ったというふうに思うのですけれども、でも同じ大学でもバラつきがあって、やはりコイツ碌に学んでないなと、寧ろ大学院にいるけれども碌な教育も受けていなくて一生懸命自分が勉強している訳でもないというような人だって具体的に誰という訳ではないですけどいるわけですよ。同じ教育システムの中、同じ大学の中でも分散があると。そして、そのように考えた時に更に言えば、沢山より多くの人が学んでいる大学、若しくはより多くの方が学んでいる学部と、同じ大学、同じ学部なのだけれどあまり学んでいない学部とか大学というものが有り得る訳ですよ。そうした時に、自

分の経験に基づいて大学教育に基づいて、いや大学教育なんて役に立たないよ、と言う人は実を言うともしかしたら学んでいない人達なのかもしれないと。僕の授業で大学教育が役に立つと思いますか、人的資本論とシグナリング理論を紹介して皆さんはどちらだと思いますかと聞いたら、僕はシグナリング理論がある程度多いのかなと思ったら、今ほぼ100%人的資本論ですね。役に立つと若い人達は言う訳ですよ。実際問題、一生懸命勉強していると思います、今の大学生をみると。そういうようなことを考えた時に、ポイントとしてはやはり学びの経験を、これはもう矢野先生の仰ったことの繰り返しになってしまうのですけれども、実際に学びの経験をさせるといったこと、これをどれだけするか、させるかといったことが大事で、この話は最初の石田先生のお話、実践とも繋がってくるのかなというような気がしましたので、一言追加させていただきました。

(西井)

はい、ありがとうございます。それでは後5、6分ですので、各講師の方から2分ぐらいを目途に、今までの説明の総括、或いは最後に付け加えたいことがありましたら、それぞれご発言いただきます。濱中先生よろしく願いいたします。

(濱中)

大学教育がどのように役に立つのかというのは、その時の労働市場の状況をはじめ、色々なことも含めて決まってくることで、簡単にはいえませんが、矢野先生が仰ったように、学べばそれは絶対に役に立つ筈ですので、そのことを愚直に大学側は訴えていくのではないのかなと思います。先ほどからもチラチラと話が出ていますけれど、企業側の見方というのがかなりまだ偏っていて、一般的にもエリート的な大学観がまだ強く残っている側面があると思うのですよね。企業だけじゃなくて、政策を議論するような人達ですらそういった前提を持っている場合が多い。さらにいえば、今の大学は役に立たないと声を大きくして言う方はいるのですが、その方が大学進学率といったような基本の情報を知らなかったりとか、そういったことも多々あります。大学の数も知らない人が多いです。有識者とされている方も例外ではないです。同時に、これもこの間、別の場で申し上げた話なのですが、今、企業の採用人事に責任ある立場で関わっていらっしゃる主な層は、「レジヤランド時代」と言われていた時代に学生だった方々です。勉強よりもサークルやアルバイト、といった学生時代を過ごしていた方々が採用人事に携わっていることの意味や影響ということには、自覚的になっておく必要があるのではないかと思います。因みに、G型L型という話が出てきたときも、最初の職業大学の話に繋がるのですけれど、その議論の前提には、「今の大学生はテニスサークルしかやっていないでしょ」という理解があるように見受けられます。何が言いたいかと言えば、大学が役に立つかどうか、という議論は、かなり危うい土台のうえで行われているということです。大学を取り巻く環境は変わった。学生たちの学びも変わっているということを大学側は地道に発信していくのではないかと

とったりします。以上です。

(西井)

ありがとうございました。それでは島先生よろしくお願いたします。

(島)

少し角度を変えて、シグナリングの話をしただけ補足します。海外でデータだとか、方法論ですね統計的な手法だとかかなり進んでいます。そういったデータだとか方法論を日本に当てはめる研究もちらほら出てきています。例えば皆さんご存知の最近有名な中室牧子さんですかね。ああいった方は一卵性双生児つまり生得的能力が全く同じなのだけれども、教育経験が違うことによって所得がどの様に影響を受けるのかといったことをやられていたりだとかですね、あとは家庭背景みたいなものをちゃんとコントロールしたときも、ちゃんと収益率みたいなものに変化が有るのかないのかというようなことを日本でもやり始めています。そして、海外の経験に基づくと、そういった生得的能力をコントロールしてもそんなに結果は変わらない、教育の効果はガタ落ちすることはない。というのが現在の状況ですし、日本でも僕も含めてやっていますけど、やはり同じようなそんなにガタ減りして全てがシグナリングで説明できるという状況ではないということを、ご参考までに今日話を理解するうえでの参考情報としてお伝えして、私のほうは以上でかまいません。

(西井)

はい、ありがとうございました。では最後に、矢野先生お願いたします。

(矢野)

今日私は、中学成績と大学成績の効果に関する 5 つの仮説というものを提示したのですが、これ 2、3 週間前に思いついたのですが、これは中々良いアイデアだと僕は思っている。要するにこれは面白いというだけの話ですが、間違っているかもしれないけれども、これって面白いのではないのかということがとても大事。だから、例えば工学部の学位研究の有効性というのは、卒論が一番大事で、一番面白い。卒論はやりたいことやれば良い。そして失敗すればいい。そして、自分で掘立て小屋作ればいい。ところが、ドクター論文になってくると段々面白くなる。失敗してはいけないとか、先行研究をフォローしなければいけないとか、アカデミック的には意味はあるのだけれども、面白くはなくなります。一番大事なのは卒業研究で自らテーマを設定して、掘立て小屋を作って失敗して、やった一と。それが役に立つかという、それ自身がとても役に立つ。そういう風にして、仕事ってというのは動いている訳なので、10 個思いつけば、100 個思いつけば 1 個は大当たりがあるかもしれない。まずは 100 個思いつかなければいけない。大学教育というのは色々な形で冒険すれば良いというのが僕の考えです。私の今日の話が皆さんのお役にたてたかどうか分か

らないのだけれども、矢野は何か発見して喜んでいるぞということだけでご満足いただきたい。あとは色々なことをやろうと思えばまた違う角度ができる。

もう1つは職業大学の話が出たのですけれども、大学教育は役に立たないと公言する人たちが、いまの大学を否定的に捉え、それに替わる職業大学を提案しているようです。こうした議論で重要なのは、「大学は役に立たない」という偉い知識人の言うことには気をつけて法がいいということです。そういう知識人は、そもそも大学に行く必要がないほどに優秀な方です。自学自習する能力のある偉い人は、大学に行く必要はないのです。そのような偉い人よりも大事なのは、学ぶこと、努力することがまだできていない人は、大学に行ったほうが間違いなくよい。自己学習する能力が身につけていない普通の人、大学で色々な自己学習して失敗して、なるほどこういうように考えるのかという体験が学びなので、偉い人ではなく、一般の人が大学に行くということがますます大事になる世の中になっていると思います。私は大衆大学こそがこれからの重要な教育機能を果たすのではないかというのが私の持論でございます。どうもありがとうございました。

(西井)

ありがとうございました。今日の研究会は、教育社会学、或いは教育経済学の立場から大学を見直そうと企画いたしました。しかしながら、今日参加された皆さんがお聞きになった通り、色々な幅広い見方や知見が示されました。大学の在り方とか学生教育の在り方を含めて様々なアドバイスがあったと思います。大学を十把一絡げで議論するのではなくて、それぞれの大学は異なっています。特に、私立学校は多様です。私立学校の中でも学生は様々な分散しています。その学生を如何にレベルアップするかがこれからの大学の課題です。厳しい環境の中で私立学校が頑張っていくことが大事です。

先ほど本年度の大学入学超過状況の発表が私学事業団からありました。今年は若干定員割れが増えているという状況です。しかしながら、私立大学はトータルでは決して定員未充足ではありません。104%ぐらいです。若干二極化しているところがありますが、入学した学生をどうやって教育するかが私立学校の課題です。定員の中の実員が重要です。定員管理が厳格化されたことによって、一部大手大学では定員増を申請しています。そのことが地方を含めて様々な影響を与えてきます。しかし、自分の大学に入ってきた学生の教育が原点であることを確認して教職員の方々は一緒に頑張りたいと願います。

私共の研究所は私立学校を中心に大学の在り方を議論する場でございます。これからも様々なご意見がありましたらお寄せください。お手元にアンケート用紙がありますので、少し時間をとっていただいて、注文や意見等をお書きくだされば、今後の研究会等での企画や研究活動に活用していきますので、どうかよろしく願いいたします。

それでは今日は長時間に渡りましてご出席をいただきまして、誠にありがとうございました。講師の先生方にもお礼を申し上げます。ありがとうございました。